

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 23 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720316

研究課題名（和文） ロシア・チュヴァシにおけるト占の歴史人類学的研究

研究課題名（英文） Anthropological Study of the History of Divination and Its Practice in Chuvash, Russia.

研究代表者

後藤 正憲（GOTO MASANORI）

北海道大学・スラブ研究センター・助教

研究者番号：70435949

研究成果の概要（和文）：

時代の趨勢によって変わりうる合理的な知識に対して、チュヴァシではト占が継続して社会的な暗黙知となっている。つまり、いちいち明確に説明されなくても、ある特定の状況では皆がそれと知ることのできるような事柄として、ト占の知識が広く共有されている。人々の生活で主要な位置を占める合理的な知識に対して、ト占は残された適所を埋めるというよりも、むしろ両者が有機的に重なって、時代に応じた日常の思考を形作っている。

研究成果の概要（英文）：

Divination is continuously sustained as the implicit social knowledge in Chuvash, Russia, while the rational knowledge undergoes changes due to the trend of times. Divination is shared as such knowledge, as all can get without any explanation on a particular occasion. It may not be adequate to say, however, that divination finds a niche for itself on the fringe of the rational knowledge in people's daily life. Rather, the rational knowledge and divination make an organic entanglement, and shape the way of thinking of people, according to the trend of times.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：ロシア、チュヴァシ、ト占、社会主義、記憶

1. 研究開始当初の背景

(1) ソ連崩壊後のロシアでは、各地で「宗教の復活」ともいふべき現象が見られる。ロシア正教をはじめ、イスラム教やシャーマニズムなど、さまざまな宗派における宗教的信仰の高まりは、社会主義によるイデオロギーが効力を失った社会で、人々に有効なよりどこ

ろを与えるものとみなされる。

その一方で、そうした宗教的要因は、民族主義的な傾向をもつ知識人を中心とした政治勢力によって、民族-社会の求心力を高める道具として利用されやすいということも指摘されている。すなわち、今日の宗教にお

いては、人々の日常的な生活に深く浸透した実践的なレベルと、観念的な諸事実として取り扱われる認識論的なレベルとの乖離が、無視できない問題となっている。

(2) ロシアのヴォルガ川中流域に位置するチュヴァシ共和国でも、今日では人々の間で宗教に対する関心が高まっている。その主要な信仰はロシア正教だが、中にはロシア正教が持ち込まれる以前の、前キリスト教的な在来の信仰を、民族のあるべき姿として主張する者もある。しかし、主に知識人の間で支持されるこうした見方は、一般に広く受け入れられているとは言い難い。

一方で、人々が病気やその他の災難に見舞われた場合、その原因を解明したり状況の改善策を求めたりするのに、占い師によるト占が今日でも広く頼りにされている。従来チュヴァシの占い師は、在来信仰に基づく儀礼では欠くことのできない職能を果たす存在だった。その後、徐々に在来信仰に基づく儀礼が行われなくなるにつれて、個人的な相談に対応することを主な職能とするようになり、今日に至っている。

現在では、在来信仰が一部の政治的有志の間で共有または論争される知識に集約されているのに対し、ト占は人々の日常生活の中で継続的に実践されている点で、明確な対照をなしている。

2. 研究の目的

チュヴァシのト占では、その背景で妖術の観念が大きな位置を占めている。人々の中には、原因不明のまま身体の不調を覚えた時など、その理由を妖術、すなわち他人の悪意による作用と結び付けて捉えようとする向きが強い。その場合、妖術の出所を究明するために、占い師が頼りとされる。したがって、ト占が行われる現場では、社会における対立の構図が浮き彫りにされる。

また逆に、社会における対立の構造が、ト占の実践基盤をより強固なものにしている面もある。ソ連時代には、ト占の担い手である占い師は、その行為が非科学的であるとして排斥の対象となった。しかし同時に、ソ連政府が実行した農業の集団化は、集団農場に参加する農民とそうでない農民の間に激しい対立を生みだし、結果的に占い師に頼らざるを得ない状況を作り出してもいた。

そして今日では、かつての社会区分はより曖昧なものとなり、対立の構図は複雑化している。集団農場が経営不振となり、かつてそこで働いていた者の中には都市へ働きに出

る者が増えた。そのため、あらゆる面で平等が原則とされていたソ連時代に比べて、今日では世帯ごとの収入にばらつきが生じ、貧富の差が生まれている。それにもなあって、隣人同士の間でしばしば対立が起こりやすく、ト占が必要とされるケースが出るようになっている。

こうしたことから、ト占はチュヴァシにおける社会的構造の内部に取り込まれていると言える。ソ連時代をへて、ソ連崩壊という歴史的变化をこうむる中で、ト占という古くからある事象がどのように受け継がれ、どのような形で人々の実践につながっているのかを調べるのが、本研究の目的となる。

3. 研究の方法

(1) フィールド調査の準備段階では、準備を進めるかわら、日本で手に入る文献を精読することによって、研究の下地を整備する。現地では、地元の図書館や文書館を使って、現地でしか見ることのできない文献資料を収集し、整理を行う。

(2) 現地調査では、可能な限りト占の行われる現場に立ち会って、当事者から事情を聴く。その場合、次の2点に注意しながら情報を採取する。

① 社会的連関と時間的連関を2つの座標軸とする場での、当事者の位置取り

ト占に頼るに至った経緯や、妖術が疑われる根拠について尋ねるとともに、妖術の嫌疑がかけられる人物について、情報提供者との関係を詳しく聞き出す。同時に、過去に経験した妖術やト占について記憶していることを語ってもらい、それらが現在の状況とどのように関連付けられるかを問う。

② 首尾一貫した認識の失敗や、認知と実践の間に見られる中断

妖術やト占に関する「暗黙知」が、社会の安定した分節構造に破綻をきたす個別の場面を見極める。他の場合には妖術が想起されト占が行われても、特定の場面ではそれにつながらないケースや、妖術が疑われる場合でも、当事者間の社会的位置づけに首尾一貫性が保たれないケースを追う。

(3) 上記の方法を総合することによって、妖術とト占に関する文化的営みを歴史的枠組みにおいて捉え、〈今ここ〉に開示される文化の動態に迫る。

4. 研究成果

(1) 歴史的アクターとしての占い師

ロシア革命以前のチュヴァシにおいて、ロ

シヤ正教による住民のキリスト教化が押し進められる中で、古い師が果たしていた役割を歴史的に検証した。その成果は、下記〔雑誌論文〕①「複合する視線」で展開した（そのもととなる論考は、ロシア語による発表〔学会発表〕①をベースとしている）。

テュルク語系の民族であるチュヴァシでは、16世紀半ばにモスクワのロシア人勢力によって統合されて以来、ロシア正教会によるキリスト教化が進められてきた。その中で、教会がチュヴァシ人の生活から排除しようとしたものの一つに、古い師の存在があげられる。

チュヴァシの古い師は、在来の信仰に基づいて儀式が行われる際に、ト占を使って供犠獣の選定を行うなど、特定の職能を果たす存在だった。しかし、教会の圧力を受けて在来信仰の儀式が行われなくなることによって、病気などの災難が起こった時に人々の求めに応じて、ト占を通してその原因究明や解決策の提示を行うことを主な働きとするようになった。

キリスト教化が進むにつれ、古い師は相談に訪れた人々に対して、しばしば教会への参拝を促すことがあった。その結果、まったく教会側の意図に反して、古い師がチュヴァシ人の間にキリスト教の要素を普及させる役割を果たしていたことが、本研究によって明らかとなった。ただし、あくまでそれはキリスト教の信条に基づくものではなく、在来の信仰物を教会に置き換えたゆえのことであり、行動の規範においては在来信仰のあり方をそのまま引き継ぐものだった。

このような点から、次のように言うことができる。チュヴァシの古い師は、チュヴァシ人がキリスト教化の歴史的プロセスをたどる中で、在来信仰とロシア正教の間を結ぶ連結器のような役割を果たしていた。ただし、今日の帝国史研究で取りざたされているような、被支配者の中から輩出された統治協力者（collaborator）としてではなく、むしろロシア正教のような統治者文化の流用者（appropriator）あるいは同調者（synchronizer）と位置付けることができる。

相手方文化の流用者、あるいは同調者としてチュヴァシの古い師を位置付けることによって、歴史主体のアイデンティティに重点を置く見方の閉塞性を克服し、新たな視点を導入することができる。すなわち、帝国支配の構造に捕らわれず、異なるアクター同士が出会う場面でその都度作られる関係性から事態を捉えることによって、文化変容で起き

ている状況を理解するための新たな展望が得られる。

(2) ト占における呪文

チュヴァシの古い師が唱える呪文として記録された資料を読み解き、民謡や諺、などなど等、他種の口承文芸のテキストと合わせて、チュヴァシの民間伝承の特徴とその作用について検討した（〔学会発表〕③、〔雑誌論文〕⑤）。また論考をロシア語に直し、それを通して得られた反響を取り入れて現地の媒体にも発表した（〔雑誌論文〕①）。

古い師の唱える呪文として過去に採取されたテキストは、あらゆる呪文のテキストに共通して見られる普遍的構造を持ちながら、一方でチュヴァシの歴史・地理的特徴を見せている。その特徴とは、ヴォルガの対岸から来た架空の人物を登場させるなど、実際の自然界では遠く隔たった土地が、目の前の空間と瞬時に結ばれる想像的な光景を口に出して表現することによって、超自然的な力を引き出すというものである。

古い師の呪文を、歌や諺等、チュヴァシに伝わる他の民間伝承と並べて考察することによって、ヴォルガのように大きな河川を瞬時に飛び越えることに特有の意味が付与されていることが分かった。ヴォルガ対岸のイメージがチュヴァシの民間伝承の様々なテキストで繰り返し現れることは、それがチュヴァシでは社会的に適切とみなされる神秘性を帯びていたことを示している。

一般に口承文芸など、無文字社会における伝承文化には、そこに刻まれた過去の出来事の痕跡（記憶）を読み取ろうとする見方が優勢である。それに対し、チュヴァシのト占における呪文のテキストは、目の前の現実とは異なる世界を喚起することによって、現実世界の認識を新たに構成しなおすという、それとは別の側面を浮き上がらせる。

実際に呪文のテキストでは、歴史を伝承する記憶装置としての機能が働く一方で、社会的に有意な神秘を喚起して現実の異なる側面へと人々を導き、そこから新たな認識を開くメディアとしての機能が、表裏をなして働いている。ト占の場面ではその双方が人々の認識に交互に表れることによって、〈今ここ〉の現実感覚が強められると考えられる。

(3) 集団化の経験と認知

ソ連時代の農業政策で実践されていた農業の集団化を例にとり、社会主義に基づく国民統制が、人々のト占に対する態度にどのような作用を及ぼしたかについて検討した

〔雑誌論文〕③④、〔学会発表〕②)。

ソ連の社会主義による近代化政策では、科学的な知識を至上として、西洋的な近代医療の普及が推進された。それと同時に、ト占は非科学的で民衆を惑わす行為として、厳しく取締まりが行われた。しかし、それでも人々の間でト占に対する依存は無くならず、むしろ反対に強められる結果となった。そこにはソ連の国家政策自体のあり方が大きく関わっている。

1930年以降、ソ連全土で積極的に促進された農業の集団化によって、穀物栽培や酪農を主要な産業とするチュヴァシでも、営農の形態によって農民の線引きが行われた。すなわち、集団化を促進する国家の言説によって、集団農場(コルホーズ)や国営農場(ソフホーズ)に参加する農民と、加入を拒否する個人農との間で明確な区分がなされた。またそれにもなって、国家の方針に反対する個人農には、日常生活様式において文化的に洗練されていないなど、否定的な表徴が付与された。その際には、文化的劣性の要因として、個人農が妖術を使うといったイメージが涵養されていった。

集団農場と個人農の間では、集団化をめぐる激しい対立が生じるようになったが、まさにこの対立の場面で、従来から受け継がれてきた妖術の観念が機能するようになった。つまり病気などの災いが生じたときに、それを対立するカテゴリー要員(多くの場合は個人農)の悪意に起因するとみなす者が、ト占に解決法を求めるようになる。このようにして、新しく作られた社会のカテゴリー区分に、従来のト占的世界観が応用されていたことが分かった。

一般に旧社会主義国家の真相に迫ることを目標に掲げた研究では、よく宗教など国家の統制を受けていたものが、統制下の限られた領域で生き残りを賭けて抵抗したり、戦略的に働いたりして、国家に対抗するという図式が描かれる。しかし、チュヴァシの事例は、ト占的世界観が社会主義の国家的イデオロギーに対抗するのではなく、むしろそのイデオロギーの中から新たな形を取って現れているさまを示している。国家権力に内包されるト占のあり方は、対立の図式に還元されない権力の実態を照らし出した。

(4) ソ連崩壊後の動き——脱集団化と自立化の過程

ソ連崩壊後の今日における集団農場解体と、それにもなう農業の自立化の過程で生じている様々な問題に直面して、人々がト占

とどのように接しているのかについて、調査と考察を行った(〔雑誌論文〕④⑥、〔学会発表〕②)。

集団農場の経営は1980年代から下落傾向が続いていたが、ソ連邦の崩壊後、最終的に解体に追いやられることになる。集団農場の農地は各農家に分配され、一部の者はそれを持ち寄って、共同組合による農場経営を再開した。しかし、中には収入の少ない農業に見切りをつけ、分配された農地を組合に売却して、自らは都市に出稼ぎ労働に出かけるなど、離農する者も多くあった。

その結果、従来のように集団農場/個人農家の明確なカテゴリー区分がなされ得ず、それぞれの農家は立場が流動的で、どの区分に属するのか曖昧な状態に置かれることになった。かつては集団農場と各農家の間で結ばれていた互惠的な仕組みは、現在ではすでに機能しなくなっている。そのうえ現地では、中央アジアの諸地域で発達しているような地縁・血縁による相互扶助のネットワークが欠如しており、各人はごく限られた範囲で偶発的に結ばれる関係に頼らざるを得ない状況にある。

計画経済に基づいて農業に対する優遇政策が敷かれていたソ連時代と違って、現在では農業にかかるコストが膨らみ、収益が落ち込んでいる。また、かつて集団農場や国家が担っていたような利益分配のシステムが機能しなくなった現在では、人々の間で不平等が強く感じられるようになっている。今日では農村よりもむしろ都市でト占に多くの顧客が集まる背景には、このように人々の間の関係が複雑多様で見えにくくなった現代社会特有の不安がある。

今日のチュヴァシでは、社会的なカテゴリー区分が流動的になることによって、人は対立が生じた場合に相手との関係性に応じて自らの立場が変わり得るといった、以前よりも不安定な状態に置かれている。ただし、日常生活でト占が必要とされる事態においては、過去の出来事の記憶が行動の基盤となっている。つまり、ソ連時代に作られた社会的カテゴリーはすでに機能しなくなっているにもかかわらず、そのカテゴリーの境界が、人々にとって自らを他と区別する契機となっていることが多い。

しかし、過去と違って現在では、国家と国家に対抗する勢力のような、鮮明な対立の図式が描かれることはない。そのため、誰もが他人の妖術を疑い得ると同時に、いつでも自分が妖術の嫌疑をかけられるかもしれない

蓋然性を持つことになる。こうした不安定な状況で生じた問題に対処する際に、ト占という従来の方が選ばれていると考えられる。

(5) 暗黙知の諸相

チュヴァシのト占は、民間伝承の一般的なテキストの中に見出されるように、キリスト教化される以前から、人々の日常生活において重要な役割を果たしていた。今日では、一部の知識人の間で、かつての在来信仰を復活させて民族文化の基盤に据えようとする動きがみられる一方で、ト占はかつてとは多少違った形をとりつつも、人々の間で脈々と実践されている。

今日に取り上げられる前キリスト教的な在来信仰が「伝統文化」をめぐる認識論的な知識だとすれば、ト占は社会的な暗黙知になっていると言える。すなわちト占は、歴史的な事象として記述されたり研究されたりして、定式化されることがない。その一方で、知識の明るい光に照らされる世界に、必然的にもなう影のようなものとして位置付けることができる。

ロシア革命期以前では、住民のキリスト教化が進められる中で、ロシア正教会が正統な知の体系を確立する一方、その対立要因が排斥される中で、ト占の役割が増していった。続くソ連時代には、主要な知の体系の地位を社会主義が取って代わったが、同じくその体系が確立する中で、ト占に対する人々の要求も維持された。そしてソ連が崩壊した今日では、資本主義による市場の知識が主要な地位を占め、その同じ経路から、やはりト占が必要とされる場面が生み出されている。

以上の経緯から看取できることは、次のようなことである。すなわち、時代の趨勢によって移り変わる合理的な知識に対して、ト占の知識が社会的な「ニッチ」(適所)を見つけるというのではなく、むしろ両者が有機的に重なって、時代に応じた日常性を形作っている。

日常生活において、どの場面でト占が必要とされるかは、そこで結ばれる相手との関係性によって変わり得る。しかし、日常の中で主要な位置を占める合理的な知識と、ト占をはじめとする社会的な暗黙知は、互いに密接に絡み合っ、その都度取るべき行為の方向性を与えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

- ① Масанори Гото (後藤正憲)、Образ Волги в чувашской народной словесности: познавательный аспект. Вестник Чувашского отделения Российского философского общества, Чебоксары, 查読有、Выпуск 5、2012、75-82
- ② 後藤正憲、複合する視線——チュヴァシの在来信仰とロシア正教会、ユーラシア世界、第1巻、〈東〉と〈西〉(塩川伸明・小松久雄・沼野充義・宇山智彦編)、查読無、東京大学出版会、2012、183-206
- ③ 後藤正憲、思い出すために忘れる——チュヴァシ農村における集団化の記憶、社会主義的近代化の経験——幸せの実現と疎外(小長谷有紀、後藤正憲編著)、查読無、明石書店、2011、317-342
- ④ Masanori Goto、Demarcation and Recollection of Collectivity in a Chuvash Village, Russia、国立民族学博物館研究報告、查読有、35 卷 3 号、2011、527-539、http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/publication/periodical/bulletin/35_3d#3
- ⑤ 後藤正憲、チュヴァシの口碑におけるヴォルガの表象——歴史の記憶と想像についての考察、北方人文研究、查読有、3 号、2010、1-14、<http://hdl.handle.net/2115/42935>
- ⑥ 後藤正憲、実践としての知の再／構成——チュヴァシの伝統宗教とト占、スラヴ研究、查読有、56 号、2009、157-178、<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicatn/slavic-studies/56/06goto.pdf>

[学会発表] (計 5 件)

- ① Масанори Гото (後藤正憲)、Взаимные отражения и присвоения своего образа между язычеством и христианством в Чувашии, Международная тюркологическая конференция «Чувашский язык и этнос в истории евразийской цивилизации», 2010 年 9 月 17 日、チュヴァシ国立大学(ロシア、チェボクサルイ市)
- ② Masanori Goto、Demarcation and Recollection of Collectivity in a Chuvash Village, Russia, The International Conference on Ideals, Narratives and Practices of Modernities in Former and Current Socialist Countries, 2010 年 3 月 20 日、国立民族学博物館(大阪府吹田市)
- ③ 後藤正憲、対岸の想像力——チュヴァシ

の口碑におけるヴォルガ、合同研究会「ロシアへのまなざし・ロシアからのまなざし——ブラハ、そしてヴォルガ」、2009年8月1日、神戸大学（神戸市）

〔図書〕（計1件）

- ① 小長谷有紀、後藤正憲（編著）、社会主義的近代化の経験——幸せの実現と疎外、明石書店、2011、346

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 正憲 (GOTO MASANORI)
北海道大学・スラブ研究センター・助教
研究者番号：70435949